

(様式 6)

2025 年 12 月 22 日

令和 7 年度博物館専門職員等在外派遣事業実施報告書

文化庁次長 殿

住 所 神奈川県三浦郡葉山町一色 2208-1
神奈川県立近代美術館
氏 名 三本松 倫代

令和 7 年度博物館専門職員等在外派遣事業の実施結果について、下記のとおり報告します。

1 派遣期間 2025 年 11 月 24 日 ～ 2025 年 12 月 3 日

2 派遣概要

(1) 派遣先名称

① 受入先

ラインベックハレン財団 (ベルリン)
C/O ベルリン (ベルリン)

② 訪問・視察先

写真家スタジオおよびエステート (ベルリン)
新国立美術館 (ベルリン)
国立写真美術館 (ベルリン)
ヘルムート・ニュートン財団 (ベルリン)
ルートヴィヒ・フォーラム (ベルリン)
ブランデンブルク州立近代美術館 (コトブス)
ライプツィヒ造形美術館 (ライプツィヒ)

(2) 派遣内容

博物館の機能強化に関する

- ・価値の形成過程にある近現代の美術品等博物館資料の国内外への発信・評価向上
- ・専門的人材による博物館事業や活動の実践

を主な調査目的とし、近現代写真の展示と活用について、研修受入先および写真家スタジオで作品と保存環境の実見とヒアリングを、その他の視察先では展示の視察と資料収集を行った。

（３）派遣成果

受入機関の概要と成果：１．ラインベックハレン財団



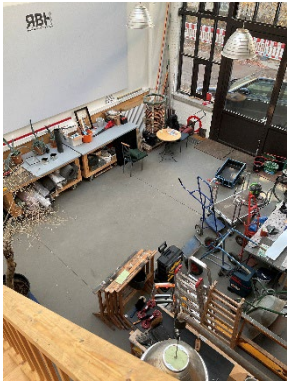
建物外観（左）。高い天窓のある展示空間（右）を三連棟の長手中央に挟み、両側面には財団以外の企業等も入居している。
〔以下撮影すべて報告者〕

ラインベックハレン財団（Stiftung Reinbeckhallen, 以下 RBH）はかつての東ベルリン地区にあたる市内南東部、シュプレー河畔の工場建築群（財団の名称は所在地のラインベック通りに由来）内にある。コレクターで弁護士のスヴェン・ヘアマン氏が1990年のドイツ再統一後に一帯の建物を入手して再開発を行い、2016年に財団を創設した。ベルリン中心部からは公共交通で1時間ほど離れているが、ブランデンブルク国際空港への途中に位置し、川を望む開放的な空間に面している。オラファー・エリアソンやアリシア・クヴァーデといった国際的なアーティストが近隣に倉庫やスタジオを設け、デザインやインテリア関係、撮影スタジオ等の会社がRBHと同一の建築棟に入居するなど、文化エリアとして発展中の場所ともいえる。

工場建築の天窓採光を活かした広大な展示空間は財団主催の展覧会実施のほかに貸出施設としても運用され、訪問時には外部企画のイマーシヴ展示が



施設に面した緑地とシュプレー川（左）。建物側面の区画に財団事務所、印刷・版画工房と収蔵庫がある（右）。



吹き抜けの造作作業スペース（左）と上階の印刷・版画工房（中）。事務所上階での作品調査の様子（右）。

行われていた。展示空間のほか活字印刷と版画に関する工房を持ち、作家でもある専任のスタッフが近隣の児童や教師を主な対象に作品制作のワークショップを行っている。

東独出身のヘアマン氏は弁護士として再統一後に旧東独地域の資産返却管理業務に携わりながら現代美術と写真を中心に作品収集を行うなかで、特に東独の女性写真家（社会主義国では多くの女性が職業を持ちキャリア形成した）の作品を評価し、ヴィンテージ・プリントを主とするコレクションの拡張を続けている。

研修では財団キュレーターのキャンディス・ヘムリン氏とアシスタントの補助を得て、所蔵写真約 260 点を実見した。写真作品の大半はブックマット装で収蔵庫に保管されている。

ヘアマン氏、ヘムリン氏、館長のザビーネ・シュレンカー氏、財団アドバイザーでギャラリストのフリードリヒ・ロック氏から伺った話では、東独時代の写真に関する企画展は当時を知る中高年世代にノスタルジーを喚起するだけでなく、1990 年代以降に生まれた 30 代から 10 代の若者からも関心が寄せられているという。再統一後の首都ベルリンは旧東独地区の再開発が著しく、日常風景、ファッションモード、工業地帯などを伝える写真は、絵画や彫刻以上に直接的なドキュメントとして強い喚起力を持つ。

ヴィンテージ・プリントからは当時の東独で入手できた印画紙などのいわば一時情報とともに、デジタル化以前の優れた写真技術が見て取れた。同時に、「現存しない社会主義国の光景をいかに日本で読み解くか」、ひいては日本における同時期、すなわち「戦後昭和期の写真表現をどう伝えるか」の問題に至る。RBH のチームとも東独写真を日本（を含む国外）に紹介する場合の歴史と美術のバランスについて話し合ったが、現状で明確な指針は決定できておらず、引き続き検討を進めていきたい。

受入機関の概要と成果：2. C/O ベルリン



建物外観と外看板。25周年を記念して過去のポスターの一覧が建物内外に掲示されていた（右）。

C/O ベルリンは写真家シュテファン・エアフルト、デザイナーのマーク・ナロシュカ、建築家インゴ・ポットの3人が2000年に立ち上げた写真展示施設である。旧東独のミッテ地区で数か所移転の後、2014年からシャーロットンブルク地区にあるベルリン市所有の「アメリカ・ハウス」（第2次世界大戦後のアメリカ占領地域に情報センターとして設立された建物）を拠点とし、非営利の財団として各種の助成ほかショップやカフェの収益、友の会からの寄付などを財源として国際的な写真家の展示と若手作家支援の授賞展、およびワークショップ等の教育普及事業を行う。写真表現の拡大に伴い映像インスタレーションやデザインなども包摂的に紹介している。

ディレクターのエアフルト氏とキュレーターのボアズ・レヴィン氏に面会し、レヴィン氏から執務スペースを含む施設の案内と運営に関する説明を受けた。

同財団は写真メディアを介した対話のプラットフォームとして機能することを意図し、収蔵は基本的に行っていない（カフェなど一部に作品あり）。国内外の写真関連機関と積極的に協働を図りつつ、巡回展においても独自性を加えている。ただし、近隣の国立写真美術館やヘルムート・ニュートン財団写真美術館とは活動方針の違いから特には連携等を行っていないとのことだった。日本人写真家では過去に畠山直哉、荒木経惟、森山大道らの個展を開催している。訪問時に行われていた同館25周年とフォトエージェンシー「マグナム」75周年を記念するマグナム所属の女性写真家12名による展覧会はICP国際写真センター（ニューヨーク）との共同制作であり、レヴィン氏が独自に展示を追加している。

施設内に暗室と工房を持ち、ジュニア、ティーン、アダルト、パースペクティヴの4つの対象に分けて実施しているワークショップをはじめ、企画によっては展覧会に際して自館でニュープリントを作成し、輸送経費の削減を図ることができる。



「Close Enough：女性のパースペクティブ マグナムの写真家たち」展会場風景

アメリカ・ハウスが位置していたように、再統一以前のベルリンにおいて西側からの鉄道終着駅であったツォー（Zoo）駅付近は西独時代以来の繁華街である（近隣の国立写真美術館／ヘルムート・ニュートン財団の建物は当時のカジノ施設）。現在でも観光客をはじめ来場者の層は幅広く、ギャラリートークはドイツ語と英語の2種類で時間を分けて行っている。地域住民の多様化に対応した多言語化が今後の課題であるという。

1956/57年の建築を改修しているため、展示空間（地上2階、地下1階）としては天井高がないが、むしろレトロシックな価値を打ち出し、時間性が重要な契機を孕むメディアとの共鳴を図っているように感じられた。

写真展示をインスタレーションとして考えるならば、サイトスペシフィックなニュープリントの作成（しばしば終了後に破棄される）は真新しいことではない。一方で、ヴィンテージ・プリントの評価やそれらの保存もインスティテューションの性格によっては重要な懸案となる。近接する国立写真美術館では折しも西独のモード写真家リコ・プールマン（1934-1996）の回顧展が館所蔵のアーカイブ資料を含めて開催されており、同じ建物内のヘルムート・ニュートン財団ではニュートンの写真と様々な歴史的写真家の作品を並置して視覚的に比較考察する展示が行われていた。写真・映像の保存と伝承について、技術と意味の双方から情報を更新しつつ実践を重ねることが重要と思われる。



ヘルムート・ニュートン財団「ダイアローグ」展示風景（左）、国立写真美術館「リコ・プールマン」展示風景（右）

訪問・視察先から：1. アトリエ、エステート訪問



マリア・ゼフツ氏アトリエ（左）、ジビレ・ベルゲマン作品資料保管室（中）、ウーテ・マーラー氏と作品保管室（右）

ラインベックハレン財団のアドバイザーであるフリードリヒ・ロック氏の協力により、東独時代に写真家として活動を始めた現存作家（ウーテ・マーラーとヴェルナー・マーラー夫妻、マリア・ゼフツ、ティーナ・バーラ）のアトリエ、およびジビレ・ベルゲマンのエステートを訪問し、話を伺った。

ウーテ・マーラー（1949-）とヴェルナー・マーラー（1950-）はともにライプツィヒ美術大学で写真を学び、1990年にベルリンでジビレ・ベルゲマン（1941-2010）らと7人でフォトエージェンシー「オストクロイツ」を設立した。単独およびユニットで制作を行い、それぞれ教育活動にも従事している。マリア・ゼフツ（1960-）はライプツィヒ美術大学で写真を学び、写真のほか映像とパフォーマンスも手掛ける。ティーナ・バーラ（1962-）は東ベルリンで写真と映画制作に携わり、1993年からライプツィヒ美術大学で写真学科の教授を務めている。ベルゲマンは師で夫のアルノ・フィッシャー（1927-2011）とともに東独を代表する写真家として日本でも個展（2011年）やグループ展（1997年）で紹介されてきた。

ウーテ・マーラー氏の保存庫では同じく東独の写真家として活動した父ルートヴィヒ・シルマー（1929-2001）の仕事も含めた整理環境をみせてもらった。シリーズとサイズによって印画紙を箱に分けた棚と、クライアントワークを編年順に整理したキャビネットに大別されていた。画像のデジタル化とデータベース作成は近年助成を得てまとめたとのことである。

写真作品においては、フィルムの管理に加え、濃淡や色調の試行、サイズの違いを含む印画紙ごとのプリントの管理が重要となる。作家が完成と認めたプリントには印画紙の裏面にサイン、スタンプ、ラベルなどが施されるが、マーラー氏の保存室ではラベルの糊が画像面を変色させた旧作の印画紙の例もみせてもらった。

ジビレ・ベルゲマンの遺族からはネガや印画紙写真の保存状況、ベルゲマンとフィッシャー夫妻の旧蔵図書ほか、ベルゲマンのエディション制作や新規の展覧会プランの監修・検討などを行っている現状をみせてもらい、新規複製やサイズ変更が可能な写真表現において、作家の意向や遺志を汲む重要性和再解釈や新たな価値の創造のバランスの問題を考える機会となった。

訪問・視察先から：2. 写真関連展の視察



ブランデンブルク州立近代美術館「日々を数えて」展示風景（左）、ライプツィヒ造形美術館「ハンス＝クリスティアン・シンク On Land」展示風景（右）

前述の美術館での展示に加え、写真表現に関していくつかの展覧会を視察した。ブランデンブルク州立近代美術館の「日々を数えて：グラフィックと写真による後期・旧東独のアーティストブックと雑誌」は当時サミズダート（地下出版を意味するロシア語）と呼ばれた非合法出版物としての美術に焦点を当てた企画展であり、ライプツィヒ造形美術館では東独出身の写真家ハンス＝クリスティアン・シンク（1961-）の個展「On Land」が開催されていた。

ジン（自主出版物）やエフェメラといった、美術史の周縁部とされてきた造形表現の再評価は東西を問わない動向といえるが、それらが当時持っていたリスクや意味は歴史的・社会的背景によって異なり、文脈をどのように伝えるかは展示や図録のあり方に関わる。ブランデンブルク州立近代美術館（ポーランド国境も近い）の展示では、作家らへのインタビュー音声のほか、州の文化省の助成を受けて地元の劇場と協働し、地下出版物の制作の様子を役者が演じたモキュメンタリー映像を作品と並置して上映していた。ドキュメンテーションの境界を問うラディカルなコラボレーションの試みと見るか、テレビ番組と変わらないメディアミックスと見るか、興味深い展示ではあった。なお、展覧会自体もゲティ研究所（ロサンゼルス）との協働企画である。現地でゲティ研究所の担当研究員に知己を得て話を聞くことができ、ローカルな事象を国際的に再考する実践例としても参考となった。

シンクは日本でも撮影を行い、これまでに展示やパブリック・コレクションもなされている作家である。再統一前後の時期にライプツィヒ美術大学で学んだ後、変貌する旧東独の風景を捉えた大型のカラー写真で国際的に評価を得た。近作による3つのシリーズを出品した「On Land」にも彼が現在居住する旧東独のメクレンブルク州で撮影したシリーズが含まれていたが、再開発に伴う風景の荒涼感と画面を満たす曇天の透徹した光に対してロマン主義に言及する、いわば現代美術文脈の写真展として標準的な紹介と構成がなされていた。



新国立美術館「断裂試験：政治と社会の狭間の美術 1945-2000」展示風景。見出しと解説の表裏構成（中、右）

ベルリンの新国立美術館で行われていた 20 世紀後半の美術を概観するコレクション展示では、セクション解説に写真が多用され、時代背景の理解を助けていた。2020 年開館のフンボルト・フォーラムに移転したアジア博物館と民族学博物館での写真・映像展示（技術的汎用化による空間演出性への偏向）と比較するとき、近現代美術における写真や映像はそれ自体が作品・記録・資料の全般に関わる表現媒体である。美術館での展示や作品・資料の収集と整理には、引き続き、かつ新たに検討すべき点が多いと考える。

（４）成果の活用計画

今回調査したラインベックハレン財団所蔵の写真コレクションについては、神奈川県立近代美術館 葉山において 2026 年度に企画展の開催を予定している。アトリエを訪問した作家をはじめ、東独の女性写真家に焦点を当てたグループ展として国内では従来にない規模の企画であり、本研修の成果が広く共有される機会となる。

同じく対面調査を行った C/O ベルリンとは、海外巡回展の共同制作や研究協力について意見を交換した。写真というメディアの特性を活かしたコンパクトな事業運営のノウハウを参照するとともに、今後の協働事業の可能性を検討していく。

その他、各視察先での写真・映像の作品の展示、資料としての活用例を、勤務館の展示デザインや印刷物に参考とする。本研修によって前景化した資料性／作品性をめぐる考察は、今後も資料収集や展示実践によって継続していく。

（５）その他

筆者の勤務する美術館は写真の専門美術館ではなく、筆者の専門領域も写真ではない。一方で、自館で開催されてきた現代写真の展覧会は概して非常に人気が高く、美術館での写真展、あるいは写真作品が主となる展示の機会は将来も増えていくと思われる。

同時に、近現代美術に関する写真資料とその整理・活用はアーカイブ形成を主要な事業の一つとする自館の重要課題となっている。しばしば「作品表現」と「記録資料」の狭間にあって評価と分類が曖昧となり、今後のデジタル化社会で比重が大きくなるだろう写真メディアについて、情報の収集と実践的な共有をしていきたい。なお、自館の職務と調整をはかるうえで、今回の在外派遣において短期滞在の研修を実施できたことは集密的だが有効かつ貴重な機会となった。

最後に、研修や訪問調査を受け入れ、作品・資料の閲覧や聞き取りと対話に時間を割いてくださった各機関と個人の方々、また訪問先との日程調整や移動に協力いただいた方々に感謝を申し上げたい。